

平成21年 5月22日現在

研究種目：若手研究(B)	
研究期間：2006～2008	
課題番号：18720193	
研究課題名（和文）	モンゴル帝国期の国際貿易と多言語環境下の文書行政の関連性に関する基礎的研究
研究課題名（英文）	Basic Research on the Relation between International Trade and Multilingual document system of the Mongol-Yuan regime.
研究代表者	四日市康博 (YOKKAICHI YASUHIRO) 九州大学・大学院人文科学研究院・専門研究員 研究者番号：40404082

## 研究成果の概要：

元朝とイルハン朝の外交および通商関係におけるイランおよび中国の国際貿易商人の役割、国家と商人の関係、および、インド洋貿易における陶磁器、銀、馬の流通と商人の関係を明らかにし、日本語、英語、ペルシア語によって国際学会、国内学会における口頭発表および論文発表をおこなった。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2006年度	1,500,000	0	1,500,000
2007年度	900,000	0	900,000
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	330,000	3,830,000

## 研究分野：人文学

科研費の分科・細目：史学・東洋史

キーワード：内陸アジア史・東西交流史

## 1. 研究開始当初の背景

モンゴル政権間の外交研究や政権内部構造研究、国際貿易史研究全般について見てみると、各テーマとも日本、中国、欧米で研究はあるが、漢語文献、モンゴル語文献、トルコ語文献、ペルシア語文献の研究はそれぞれ全く別個におこなわれてきた。

また、文書行政研究と文書そのものに対する研究はそれぞれに研究蓄積があり、特に日本・中国における漢語文書研究、欧米・日本におけるモンゴル語文書研究、日本・ドイツにおけるトルコ語（ウイグル語）研究、イランにおけるペルシア語研究の蓄積は極めて深い。それらの研究成果を利用しながら横断

的に考察を進め、また、中国においては非漢語複合文書、イランにおいては非ペルシア語複合文書という十分に研究がなされていない史料を主要な研究対象として、複数言語の複合状況と東西交流による社会変容を検討する必要性があり、それによりモンゴル帝国期の各言語の文書研究間のミッシング・リンクを埋めることができる。

## 2. 研究の目的

研究全体の構想としては、モンゴル帝国とその継承政権、特にユーラシア東部の元朝とユーラシア西部のイルハン朝に関する漢語史料、ペルシア語史料、モンゴル語史料の調

査・収集と研究を通じて、モンゴル政権間の外交関係に国際貿易商人がどのように関係していたのか、また、モンゴル政権が当時の東西交流にどのような影響を与え、その結果モンゴル政権下の社会がどのように変容したのかを明らかにすることを検討する。

その中で、本研究課題の目的は、漢語史料とペルシア語史料を中心とした外交・交易関連史料、ペルシア語、モンゴル語、トルコ語の命令文書史料の検討により、以下のような具体的問題を検討することである。

(1) 各モンゴル政権下の社会における社会と商人と国家の関係。商人たちはどのように国家の通商行為を代行し、モンゴル政権内の行政機構に参加していたのか。その結果、モンゴル政権下の社会にどのような影響がもたらされたのか。

(2) モンゴル政権の多言語環境下での文書行政の構造と漢語・モンゴル語・トルコ語・ペルシア語を中心とした各言語の複合関係。また、ユーラシア規模の東西交流によって各モンゴル政権の文書行政にどのような影響が生じ、それが統治下の社会にどのような変容をもたらしたのか。

(3) 商人の行政参加や財務官僚との提携関係はモンゴル政権下の文書行政、及び外交・通商政策にどのような影響を与えていたのか。また、モンゴル人、トルコ(ウイグル)人、ペルシア人、漢人、高麗人やムスリム、仏教徒、キリスト教徒、ユダヤ教徒など各官僚の民族・宗教の違いは行政構造、政策決定にどのように反映されていたのか。

### 3. 研究の方法

(1) 社会と商人と国家の関係に関して。漢語史料については、『元典章』などの法制史料、或いは商人に関連する人物の墓碑銘などを収録した文集史料・地方誌史料などを閲覧・複写し、関連記事を収集する。また、元朝関連の典籍で中国に現存する版本・抄本を確認しなければならない場合・石刻資料で写真や校訂が十分に研究に利用できる形で刊行されていない場合、所在元で資料調査をおこなう。

モンゴル語史料は、主にモンゴル最古の編纂史料である『モンゴル秘史』(『元朝秘史』)を使用する。これは主要な刊本・抄本が刊行されており、史料収集のため国内・海外に赴く必要はないが、読解に歴史的・人類学的・言語学的に極めて高度な知識を要するため、日本国内や内モンゴルのモンゴル秘史研究者と常に意見交換をしつつ読解を進めてゆく必要があり、場合によっては共同で読解

作業をおこなう。

ペルシア語史料に関しては、イルハン朝期編纂史料を中心に、日本・イランで写本史料の閲覧調査、複写により史料研究・収集をおこなう。

(2) 多言語環境下での文書行政に関して。漢語史料は、元朝に関しては最も命令文言が多く収録されている石刻史料を使用して、関連史料の収集と読解に努める。そのうえで、漢字文化圏におけるモンゴル政権の命令書に、他の地域とのどのような共通点、相違点があり、どのような特徴を持っているのか、どれがどのような背景によっているのかを考察する。そのためには、並行してモンゴル語・ペルシア語の命令文書の考察もおこなわなければならない。モンゴル語史料に関しては、まず、欧米やロシア、モンゴルなどで刊行された校訂史料・写真版や研究書の収集をおこなう。

ペルシア語史料には関しては、世界中に散在しているイルハン朝期の命令文書に関して写真・校訂などが掲載されている各種刊行資料を収集するほか、近年、イランにおいて整理が進められつつあるアルダビール・サフイーウッディーン廟文書群(アルダビール文書)の利用が効果的であると考えられる。当該文書群約800件のうち、イルハン朝期のものが約80件、うち数件はモンゴル語、トルコ語、漢語の複合文書である。当該文書はモンゴル語、トルコ語については史料紹介・史料整理の域を出ておらず、内容分析においては研究の余地がある。また、漢語部分や各言語の複合状況についてはほとんど研究がなされていないため、本研究で考察の対象とする。アルダビール文書の研究利用に際しては、イランにおける研究責任者であるテヘラン大学考古学研究所の Emād al-Dīn Shaykh al-Hokamāi 研究員と協議を重ね、共同で研究をおこなえる体制を整えてゆく。ただし、所有者のイラン国立博物館の意向によっては全ての文書が調査できない場合も想定され、その場合はドイツやアメリカ所蔵のマイクロフィルム資料も取り寄せて利用する必要がある。

(3) 商人・国家関係と文書行政の関係について。(1)、(2)と使用資料が重複するため漢語・ペルシア語・モンゴル語史料とも別個に資料収集をおこなう必要はないが、ラテン語・イタリア語史料、特にイタリア商人や修道士の記録なども考察の対象に入れなければならない。

得られた成果は順次、国内国外の学会報告や論文として発表してゆく。特に(1)は(2)

(3) に比べて研究の蓄積があるため、論文化も重点的におこなう。(2)(3) は史料収集・整理と基礎研究的作業を中心に研究をおこなう。

#### 4. 研究成果

(1) 社会と商人と国家の関係、(2) モンゴル政権の多言語環境下での文書行政、(3) 商人・国家関係と文書行政の関係、のそれぞれのテーマに関して研究をおこない、国内・国際学会において考察結果を発表した。具体的には、(1) に関しては、クアラルンプールで 2007 年 8 月に開催された The 5th International Convention of Asian Scholars のパネル“Indian Ocean, Southeast Asian, and East Asian Connection: Intra-Asian Trade during the 13<sup>th</sup>-18<sup>th</sup> Centuries”において“*Intra-Asian trade from the perspective of the Eurasian trade network under Mongol rule in the 13th and 14th centuries*”という題目で発表した。(2) に関しては、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の羽田亨一教授との共同研究「イラン・イルハン朝期多言語複合文書の発展的研究」をおこない、得られた知見の一部は「ユーラシアの東と西におけるモンゴル文書形式の影響」(平成 19 年度九州史学会シンポジウム「文書から見たアジアの外交」福岡、2007 年 12 月)において報告をおこなった。

(3) は(1)と相関的な関係にあるが、両者の研究実績として、ミュンヘン大学のアジア学研究所で開催された International Symposium: The East Asian Mediterranean – Maritime Crossroads of Culture, Commerce, and Human Migration、(München, 2007 年 11 月)において、“*From Eurasian trade to Intra-Asian trade: impacts and implications of the Mongol hegemony for Maritime Asia*”という題目で口頭報告をおこなった。そのうち、特に(1)を中心に論文化をおこなった。以下、その内容を挙げる。

元朝下において、官との関係を有しつつ国際貿易に従事した商人の交易形態を明らかにしたが、それに関しては以下のようにまとめることができる。

元朝の官民交易形態が半ば制度的に存続した背景には、モンゴル皇室と商人を結びつける財務官僚や近侍などの仲介が大きな要因として存在した。彼らはいわゆる色目人であり、地縁・血縁・教派などで結ばれた商人たちを召募して宝貨売却を斡旋し、「中賣寶貨」存続の原動力となった。また、商人たちの多くもイスラーム商業圏と深い縁故を持っていた。両者の強い結びつきこそ、元朝下

で国際交易がもっとも繁栄し、ユーラシア大陸・インド洋海域規模で連鎖した人・モノ・情報の交流が活性化した要因であった。すなわち、元朝の交易支配は行政機構や制度そのものよりも、商人と官僚や近侍などの人間関係に負うところが大きい。

また、イルハン朝治下イランにおけるキシュ商人・ホルムズ商人および元朝治下中国沿海地域における海上商人が地域社会・国家権力との相互協力関係を有し、半官半民的な立場で国際貿易を展開したことに関しては、以下のようにまとめることができる。

元朝・イルハン朝間の使節派遣は、いずれも国家間の通商行為であると同時に、使節自身が私財を用いて交易をおこなっており、官貿易と私貿易の両側面の性質を同時に有していた。すなわち、中国においても、イランにおいても、モンゴル政権は有力な大商人の一族に官職を与えることによって国家機構の中に取り込み、資金面・行政面・軍事面で援助すると共に、その様々な利益を受領することで国力を豊かなものとした。彼ら大商人は多くの場合、大土地・大資本を所有する地域社会の指導的立場にあり、同時に一族から官僚等を輩出する有力家系であった。中国においては彼らは「官豪勢要」と呼ばれる。逆に、商人側は最大規模の購買力を有する「国家」を自らの取引相手とし、同時に国家権力の保護を得ることで、通常の商人と比べて有利に交易をおこなうことができたといえる。したがって、国家は商人にとって必ずしも管理・抑制する存在であるわけではなく、むしろパトロンであると共に顧客でもあり、相互扶助関係が成立することがしばしばあった。

さらに、商人と地域社会の繋がりに深く関与していた宗教コミュニティと商人・国家の関係とそれが国際交易に与えた影響に関しては以下のようにまとめることができる。

歴史的に見て宗教と交易とは相関的な関係にあったといえる。宗教教団が運営を続けるのは何らかの経済活動が必要である。商人組織と宗教教団は必ずしも同一ではないが、互いに補い合う関係にあった。一方で、大商人は富戸・地主階層でもあることが多かった。彼らは一族から官僚を輩出して元朝行政に参加することで、地方統治に寄与すると同時に自分たちの利益を行政上に反映させた。すなわち、元朝下の大商人は、「富戸豪民」「財務官僚」「宗教教団」という3つの要素と密接に関わりながら活動していた。一方、元朝の行政機構のなかで、商業・宗教関連の官府は、商人や聖職者を管理すると同時に、彼ら

の權益を元朝の行政に反映させる役割をも果たしていた。その長官たちは交易管理を担う廷臣集団として組織化されており、それは、各宗教の權益を代表する立場にもある彼らに対して、内部である程度のバランス関係を生じさせ、利益調整をおこなうためでもあった。各宗教側から見れば、交易という利害が直接やりとりされる場で各自の權益を確保することができた。重層的な権力構造のなかで上からの利益配分に対して、下位の者が代表者を通じて權益を確保し、それをさらに下部へと再分配してゆく構造がモンゴル帝国とその継承政権には特徴的であったが、官僚と商人、宗教教団の関係もまたその構造なかの一端とすることができる。

以上の研究成果は海外の研究者からも高い評価を受けたようで、ウィーン（オーストリア科学アカデミーイラン研究所、2006年、9月）、ミュンヘン（ミュンヘン大学アジア研究所、2007年11月）、トルファン（中国社会科学院歴史研究所、2008年10月）広州（中山大学歴史系、2009年3月）、台北（国立故宮博物院、2009年、5月）が主宰した国際シンポジウム、ワークショップにおいては招待研究者として招聘を受け、報告をおこなった。また、第4回トルファン学国際研究会（中国社会科学院歴史研究所、2008年10月）では報告内容に対して高い評価をいただき、閉会式において名前と報告内容を紹介された。

今後の研究方向としては、国家と商人の関係の背後にある地域社会の様相や地域社会相互の関係、社会集団の位相と構造、広域に分散した社会集団の動き、それに関わるモノ・情報の動きに焦点を当てて研究を続けてゆく。

#### 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 6 件）

- ① YOKKAICHI Yasuhiro, 2008. "Two diasporas and the Eurasian trade network under the Mongol rule in the 13th-14th centuries" Angela Schottenhammer [ed.] *The East Asian Mediterranean – Maritime Crossroads of Culture, Commerce, and Human Migration*. pp.73-102. Wiesbaden: Otto Harrassowitz, 査読無
- ② YOKKAICHI Yasuhiro, 2008. "Horses in the East-West Trade between China and Iran under the Mongol Rule," Bert G. Fragner,

Ralph Kauz, Roderich Ptak, Angela Schottenhammer [eds.]. *The Horse in Asia: History, Trade and Culture*. pp. 87-97, pp. 278-279 Wien: Verlag der Österreichischen Akademie der Wissenschaften, 査読無

- ③ 四日市康博, 2006年5月「元朝南海交易経営考——文書と銭貨の流れから」『九州大学 東洋史論集』第34号、182～203頁、査読有
- ④ YOKKAICHI Yasuhiro, 2006.3. "Three Bureaucratic Systems and Supervision of International Trade under the Yuan Dynasty." *Interaction and Transformations* 3, pp.21-38, 査読無
- ⑤ 四日市康博, 2006年2月「元朝とイル=ハン朝の外交・通商関係における国際貿易商人」森川哲雄・佐伯弘次〔編〕『内陸圏・海域圏交流ネットワークとイスラム』79～91頁、福岡：権歌書房、査読無
- ⑥ YOKKAICHI Yasuhiro, 2005.11. "Az Sīraf be Kīsh: tejārat-e Oqiyānūs-e Hend va Kīsh dar 'asr-e Moghūl." ("From Siraf to Kish: Kish and Indian Ocean Trade in the Mongol Period") *Proceedings of the International Congress of Siraf Port*, pp.125-135, Bushehr (Iran): Bonyad-e Iranshenasi (Iranology Foundation), 査読無

〔学会発表〕（計 11 件）

- ① 四日市康博, 2009年3月8日〈元朝江南統治與市舶政策〉中日古代中國國家運作機制國際學術研討會、廣州：中山大學歴史系
- ② 四日市康博, 2008年12月14日「文献から見たインド洋西海域の中国産交易品」国際シンポジウム「海のシルクロードとアジア——沈没船と陶瓷器」、瀬戸：愛知縣陶器資料館
- ③ 四日市康博, 2008年7月26日「元代の綱と海外交易——博多「綱首」再考」国際学術研討会〈東亞文化交流——人物往來〉、杭州：浙江工商大學日本文化研究所
- ④ YOKKAICHI Yasuhiro, 2007.11.2. "From Eurasian trade to Intra-Asian trade: impacts and implications of the Mongol hegemony for Maritime Asia." International Symposium: The East Asian Mediterranean – Maritime Crossroads of Culture, Commerce, and Human Migration. München: Ludwig Maximilians Universität München

- ⑤ YOKKAICHI Yasuhiro. 2007.8.4. “Intra-Asian trade from the perspective of the Eurasian trade network under Mongol rule in the 13th and 14th centuries.” The 5th International Convention of Asian Scholars, Kuala Lumpur
- ⑥ 四日市康博, 2007年6月1日, 「モンゴル帝国・元朝期の東西交流——漠北と南海」専修大学生田キャンパス130年記念館完成記念公開シンポジウム「波濤を越えてシルクロード」、東京：専修大学
- ⑦ YOKKAICHI Yasuhiro. 2006.10.19. “Horses in the east-west trade between China and Iran under Mongol rule.” International symposium “The International Horse Economy of Iran, India, and China,” Wien
- ⑧ YOKKAICHI Yasuhiro. 2006.4.7. “The Structure of Power and NANHAI Trade from the Perspective of Local Elites in Yuan Period Zhejiang.” The 58th annual meeting of the Association for Asian Studies, San Francisco
- ⑨ 四日市康博, 2005年12月11日, 「イル=ハン朝の宰相と国際貿易商人の提携関係——特にインド・中国方面のインド洋交易に関して」平成17年度九州史学会大会（イスラム文明学部会）、福岡：九州史学会
- ⑩ 四日市康博, 2005年12月11日, 「元朝南海交易経営考——主に制度面から」平成17年度九州史学会大会（東洋史部会）、福岡：九州史学会
- ⑪ 四日市康博, 2005年7月4日, 「元代集寧路古城遺址與“陶瓷之路”——研究展望以及今後の課題」中國・內蒙古自治區出土遼金元瓷器國際學會、呼浩和特・赤峰

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

四日市康博 (YOKKAICHI YASUHIRO)  
九州大学・大学院人文科学研究院・  
専門研究員  
研究者番号：40404082